

## 式辞（広島キャンパス 2012）

卒業生・修了生の皆様、おめでとうございます。ご家族と関係者の皆様方、お祝い申し上げます。

ご来賓の方々におかれましては、ご多忙のなか、本学の式典にわざわざご光臨賜り感謝いたしております。また、本学関係者とともに、いつも変わらぬご支援に厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

<卒業生・修了生の皆さま、お座りください。>

（注：冒頭からここまで三キャンパス共通）

卒業生の皆さまは、本学広島キャンパスで、学部で、国際文化、健康科学、経営学、経営情報学、あるいは、大学院で一層の研鑽を積み、本日ご卒業、修了なさいます。これは本当におめでたいことでもあります。

おめでたいのは、第1に、皆様は、今日の社会で大変重要な専門の学問を修め、それぞれ学士の学位、修士の学位を見事に取得されたからです。（ここから、\*\*\*印までは、三キャンパスでほぼ同じ内容です）しかも、第2に、本学の学位は、日本全国でみても大変価値のある学位だからです。なぜ価値が高いかといえば、本学の研究力は高く、その高い研究力をもって、いい教育がなされているからです。日本の大学の研究力をみる場合、よい指標とされるのは、科学研究費補助金（略称で科研費）の採択件数ですが、中四国九州沖縄の全部で25ある公立大学のなかで、本学はこの件数は4年連続第一位です。国立大学の研究者数は多いので、国立大と単純に件数を比較できませんし、大学にはさまざまな種類の研究者があり、科研費に関係する教員数を外部からは正確に把握できませんので、仮に、各大学の年間の経常費・総費用で採択件数を割ってみますと、平成21年度で本学は1億円当たり1.37件で、中四国九州沖縄の全部で22の国立大学のうち、平成21年度の年間経常費が同年9月時点で公表されている13大学と比較しますと本学は相当な上位でした。国立大学と公立大学の研究にはしばしば性格の違いがありますから、この数字だけで判断するわけにはいかないものの、本学の研究力は高いとっていいと思います。\*\*\*

しかも、在籍教員数で科研費採択件数を割った採択教員比率で見ますと、最近のある年には経営学科で50%になっており、これは特筆していいほど高いのです。さらに付け加えますと、大変嬉しいことに、広島県内の大学間では最近いい意味で競争が働き、広島の有効私学のいくつかは科研費獲得数を大幅に増加させているのです。これは県民の方々にも次第によく知られてくるようになっていくと思っています。

（ここから###印まで三キャンパスほぼ同じです）皆様は、この研究力の高い大学では教育を受けられたのです。しかも、本学では、全学部全学生が卒論を書いて卒業します。卒論では、教員の指導の下、科学研究の正しい方法・手続きにもとづいて、課題を学生がみつけ、文献渉猟し、論証か実証をし、創造的に結論を導き、文章にまとめ、吟味し、公開の場で発表します。この発表会では、厳しい質問も出、学会でほとんどそのまま通用するほど研究論文として優れたものがいくつもあり、本学の学生は本当に大学らしい教育を

受けて卒業します。###

もう少し本学の現在の姿を紹介しますと、本学は教職員や学生・大学院生の努力、それに県や市の関係者の協力があって、上で述べた高い研究力を基礎に、文部科学省が選定し、予算をつけてきたよい教育的取組、いわゆる教育 GP（グッド・プラクティス）に4学部のすべてで総計5件採択されていますし、図書館の充実度は、全国約750大学を対象とした週刊朝日の調査で、最近の3年は、23位、10位、15位です。図書の借り出し数は、毎年、東大や京大などとほぼ同じで、中国地方にある5つの国立大学の、1.5倍から2倍の高さです。それだけではありません。地域貢献でも、全国770ほどある大学の中で一昨年は11位、昨年は、すこし順位は下がりましたが、しかしそれでも22位でした。日本では30位以内であれば優秀とされていますから、地域貢献も大変いい位置にあるといえます。こうして本学は、教育、研究、地域貢献の3つの領域のすべて全国有数の大学になっているといえます。

このような大学で、上のような教育をうけて、ご卒業になるのです。皆様、本当におめでとうございます。また、幼いころから本日の卒業生を大事にお育ていただいたご家族や関係者の皆様、学生諸氏は、本学で、高等教育をうけて、外観以上に内面の能力と人柄が大きく成長してご卒業になるのです。重ねてここで、ここからお祝い申し上げます。

ところで、世界でも日本でも、グローバル化が、急速によいよ広く深く進行してきています。日本の企業は外国人の雇用を増やしていますし、海外展開をますます広域に大規模に行っています。

そこで、本学の次の課題は国際化だと考えています。現在、本学の、国際交流協定は7か国11大学で、うち2つの大学とは交換留学生の制度もあり、実際に学生が行き来しておりますし、留学生数は約70名ですから、公立大学としては、国際化は良い方だといえます。しかし、絶対数でみて海外留学にでかける学生は多くありませんし、海外で働いている卒業生が多いわけではありません。これは本学だけでなく、日本全体にイえることで、海外留学する学生はむしろ減少しており、若者の内向き志向が話題になっています。

しかし、本当にそうかと思い、調べてみますと、かならずしも若者は内向き志向とはいえないようです。とくに最近はワークキャンプというシステムで海外へでかける人が多くなっています。ある団体の主催するワークキャンプでは日本人が年間で600人とか700人とかの総数になり、数週間から数カ月、自分で参加費用を払い、さまざまな働きにでかけ、汗を流し、現地の方と交流をしています。

現在、日本企業等は企業活動の展開をアジアやメキシコ等へのシフトを強めていますが、このとき大学人としては、その先の時代を考え、アフリカ、それも中央から南部のアフリカに注目すべきだと思いますので、とくに、中国や韓国はすでに多くの企業や人が出かけており日本が遅れをとっている、ザンビアやケニヤについて調べてみますと、ワークキャンプ等で日本の多くの若者も多くアフリカに出かけているようです。この団体では欧米でのワークキャンプも多いのですが、アフリカに12%の人が参加したといえます。そして、生きる充実感を感じ取って元気に帰国する人が多いのです。写真でみますと汗まみれになって働いてきた、笑顔が誠に素敵です。

さいわい、たまたま、南米ペルーやチリ、そして、ケニヤ、ザンビア、その他でキャン

プに参加し今年の3月に帰国された20歳の女子学生と連絡がとれましたので広島に来ていただきお話をお聞きしました。彼女は大学1年生のとき、懸命にアルバイトをして150万円をため、1年にわたる世界一周のワークキャンプにでかけたのです。ケニアでは、宿泊はホームステイで、サラリーパースンの初任給が1万4千円ほどのところで、なんと月4万円もの家賃を払い、ボランティアで無償で貧しい地域の障害者教育の支援をする仕事を2カ月ほどし、ザンビヤに行ったそうです。非常に大きな体験をいっぱいして、目をキラキラさせていましたが、4月からは大学3学年の生活に戻るそうです。

国際化というとき、通常の大学への派遣・受け入れでなく、世界各地で地元の人々とまじりあって、生活体験し労働体験する学生も少なくなく、そこで彼ら彼女らは世界の若者とも交流し、しっかりと生きること感じ取って帰ってくるようです。高校卒業から大学入学までの期間を、欧米ではギャップ・ターム、あるいはギャップ・イヤーといい、このときに大学などでは経験できないことをしっかり体験し、考える機会とし、あえてこの期間を長めにするのが欧米の最近の考え方です。もし、日本の大学が秋入学制をとるとすれば、4月から9月末までがギャップ・タームということになりますが、日本の、そして、広島の大学も、東京大学だけではなくギャップ・タームを考え、こうした点も視野に入れて、大学の国際化を考えていくべき時代が来ています。

うれしいことに、本学の学生も相当な数の学生が、本学の支援もうけて、国際ボランティアにでかけており、その人数は、先ほど引用した週間朝日のランキングでは全国53位となっていますから、本学は、ギャップ・イヤーに近い事を実施してきている先進大学のひとつといえます。

ところで、外国にでかけたとき、広島の知名度は抜群です。イギリスの知識人は必ず読む、タイムズ紙の記事を検索しますと、東京や京都の記事件数が多いのは当然なのでしょうが、広島の記事件数は805件で、これは大阪の874件とあまり差がありません。名古屋は215件、横浜302件、福岡84件ですから、広島の知名度は抜群とっていいのではないかと思います。ちなみにゲルニカは260件です。

それで、広島の人、あるいは本学の関係者は、広島という名を出し、平和への貢献を念頭におき、相互理解が平和への道だと話しはじめれば、世界中で親密な交流が始められると思います。内向き志向などという評判は遠くに投げ飛ばして、どこで働き、どこで学んでいても、国際交流を考えながら、元気にご活躍ください。

皆様方は立派な大学でいい教育を受けられたのですから……。

本日はおめでとうございます。

平成24年3月23日

県立広島大学 学長 赤岡 功